

# 図解 日本橋魚河岸から築地市場へ

江戸時代のはじめから、日本橋のたもとで栄えてきた日本橋魚河岸・魚市場は、1923(大正12)年の関東大震災ですべてが焼きつくされてしまった。このとき、当時の東京市は、日本橋よりも広く衛生的で、輸送に便利な場所に移転させることを決め、そして選んだのが築地だった。築地は日本最大の卸売市場となり、現在にいたるまで都民の食生活を支えてきた。



関東大震災直後の日本橋魚河岸。300年以上の長い歴史をほこった日本橋魚河岸は、関東大震災によって歴史の幕を閉じた。



## 築地市場の誕生



築地市場は1935(昭和10)年に開設した。船で運ばれてきた品物の陸揚げに便利な海岸沿いにあり、汐留にあった貨物駅から引込線(専用の線路)が引ける場所として築地が選ばれた。おうぎ形の弧部分に線路と駅があった。

広さは東京ドームの約5個分もあるんだって!



市場内の仲卸業者売場のようす。場内は基本的に関係者以外立ち入り禁止だ。



### ●野菜の市場も築地に移転

築地市場といえば魚市場の印象が強いが、野菜やくだものをおつかう青果市場もある。青果市場のはじまりは、江戸時代から京橋川北詰にあった京橋大根河岸などだったが、ここも関東大震災で焼けたために、魚市場とともに築地に移転した。



関東大震災以前の京橋大根河岸のようす。

### 放射能汚染マグロ事件

1954(昭和29)年3月1日に、アメリカが南太平洋で行った水爆実験で、日本のマグロ漁船・第五福竜丸が巻きそえを食って死の灰をあびた。そのときに捕ったマグロなどは築地市場に運ばれたが、放射性物質に汚染されていたので出荷することができず、市場内の空き地に埋めて処分した。



水あげされたマグロの放射線量を測る検査員。この事件で、全国の市場が混乱し、魚の消費も落ちこんだ。

## 築地市場のようす

### ●水産物部卸売業者売場

卸売業者は、トラックで運ばれてきた魚を、朝5時ごろから行われる「せり」という方法で、仲卸業者に販売する。毎年、年のはじめに行う初せりでは、本マグロ1本数千円など、いつもより高い値段がつく。



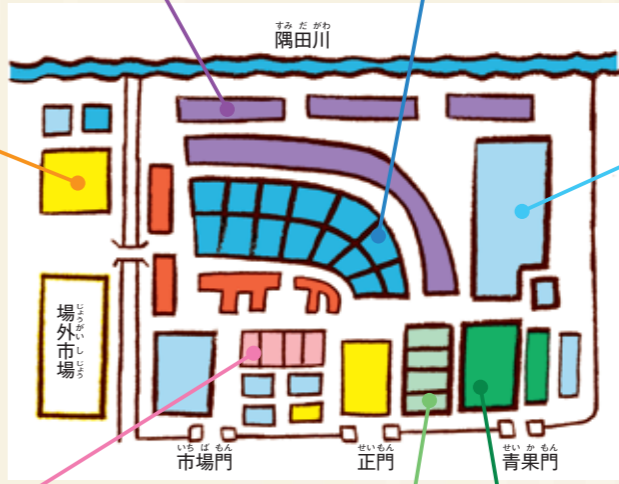
### ●水産物部仲卸業者売場

仲卸業者が、卸売業者から仕入れた品物を販売するエリア。町の魚屋や寿司店、飲食店などの人が買いに来る。築地市場には700以上の仲卸業者の売り場がある。せまい場所での品物運びには、ターレットという乗り物が活躍する。



### ●駐車場

夕方から真夜中に、全国から魚や野菜などがトラックで運ばれてくる。毎日たくさんの車が入り出りする。



### ●冷蔵庫棟

大きな冷蔵・冷凍庫になっている建物。魚などの品物の鮮度を落とさないように保管したり、市場で使う氷をつくったりする。



### ●魚がし横丁

買い出しに来た人などが、食事や買い物をする店が約140軒ある。一般の人でも利用できる。



### ●青果部仲卸業者売場

仲卸業者が、卸売業者から仕入れた野菜やくだものを、町の八百屋や飲食店などの人に販売するエリア。築地市場には、100以上の青果部の仲卸業者の売り場がある。



### ●青果部卸売業者売場

卸売業者が、全国から届いた野菜やくだものを受け取って保管するエリア。朝6時ごろからせりを行って、仲卸業者に販売する。



### 場外も大にぎわい

小売店や飲食店の人々が利用する、「場内」とよばれる築地市場のとなりに、一般の人が利用できる、築地場外市場がある。鮮魚や干物、野菜や漬け物、料理道具などの店が約400もあり、毎日、買い物客でにぎわっている。外国人の観光客も多い。



多くの買い物客が訪れる築地場外市場。早朝から午後1時ごろまで営業している。

### 築地の市場が引っ越す!?

東京都は古くなってきた築地市場の建てかえを計画していたが、建てかえには時間がかかるなどの理由で、江東区豊洲への移転を決めた。江戸時代から中央区内で続いてきた魚市場がなくなることに反対している人もいる。

